初天神

試し読み

十年と不成（ならず）

ふいごは京童の説に稲荷の御神天上より持来し給ふとかや。鍛冶を初一切の鉄物師是を用ゆ。大坂天満ふいご町より諸国之出す也。

――『人倫訓蒙圖彙』

打ち寄せる波の音が聞こえている。

あたたかな陽光の差す座敷の中央には将棋盤が置かれ、若い僧侶と兄弟子とが向き合っている。

「…で、ここの金が弱くなりました」

「うむ。香車かこちらの成歩と考えたが」

「さすれば、この香車を不成（ならず）として妙手、いかがいたします？」

「龍で仕留める」

むと、僧は黙り込んでから膝を打つ。

ちらりと鉄次郎を見、兄弟子は続けた。

「お見事です」

「しかし、不成とはおもしろい」

「弟弟子の悪手にございます」お忘れ下さい。

「ほう」

何事もなかったように動かした駒を戻し、如才なく相手を持ち上げる。そうか、あれは捨てるべきだったのかと知ると己の至らなさに顔が赤くなりそうだった。

「先ほどの歩を生かして銀を封じたのはお見事です」

「それだけに急いてやられてしまったがな」

と、僧は鉄次郎が脇へ置いた茶碗を手にする。始めに置いていたが最後まで手を付けず、一局を終えて淹れ直したものをここでやっと口にしたのだ。

「いえ。剃髪されても将棋の腕はまるで鈍っておりませんようで」

「これが頭が寒いのよ」

と、からからと笑い、下座の隅に控えていた鉄次郎を見遣る。見られてこちらは肩を竦ませた、尻がもぞもぞしてしまう。

「……」

兄弟子はやわらかな笑みを浮かべたまま何も言わなかったが、鉄次郎はこの僧の法衣ではなく、二本を差してのきびきびした所作や、凛々しい髷に見慣れていたからぽかんとするばかりなのだ。彼は御旗本の三男坊で、よく本家や大名屋敷での『お好み』（将棋好きな大名、旗本、及び城内勤務者が行う将棋会）や番勝負にも姿を見せた。碁ならば安井家門下に、将棋は伊藤家、大橋分家で腕を上げたものだ。大柄で偉丈夫、顔つきはどこか神経の細かそうな性にもみえ、気さくで朗らかなうえ、機転も利き、鉄次郎が弟子入りしたての頃からよく声を掛けてくれた。それがぷつりと途絶えたのは一昨年のこと、聞けば奇病に倒れたという。控えの間でも手合いそっちのけで話されていたから鉄次郎もよく覚えている。流行病でもない奇病とは何なのか、けれども一年で面差しは変わっていた。

「ですが、また指せます」
やわらかいが強い兄弟子の言葉に眉をくしゃりと歪ませる。
「碁家なんだがな」
鉄次郎は詳しいことを知らないが、家に関するよくない噂もそれに乗じて流れたらしい。ひと月ほどで誰も御旗本の名を口にしなくなり、一年半も姿を見ることがなかった。養子が決まっていたが病のせいで流れてしまったらしい、兄弟子はそれを聞いて沈んでいた。寡黙で沈着、常に黙々と写譜をし、詰物（詰将棋）を解き、創り、と精進を怠らない姿は苛烈でもあり、鉄次郎のような子供には畏怖すら覚えていたものだが、ただその寂しげに落ちた肩にはこちらの方の胸が痛んでしまった。弟弟子相手だからか気を張って、年が近いのもあるし、何よりも率直に物が言えるあの方のお人柄は、学ぶべき点が多いのだ、とは言ったが、友と思い、盤を挟み語らうことが楽しいのだろうと鉄次郎は思う。兄弟子と鉄次郎は年が離れているし、他の弟子達も近くて十二の差だ。
「鉄次郎はいくつになった、兄弟子殿や家元殿に扱かれて強くなったろう。この禿頭はどうだ？」
「はッ」
びっくりしたので横に鎮座した火鉢に肘をぶつけてしまった。鈍い音が響く。
「鉄次郎…」
「相も変わらずのようだな」
そうだ、鋭さはそのままなのに、丸みがあるのだ。
「は。春には十六になります。道征様のお姿、よくお似合いです、私ですと頭の形が悪いのでそのようにはまいりません。あの、ですが、安井家は僧籍ではありません。碁家ではその方がよいのでしょうか？」
碁家は四家で、織田、豊臣にも仕えた筆頭といわれる本因坊が僧籍である。城内での席次にならうと本因坊、将棋の大橋となっている。将棋の者も名人となると剃髪となり、それはやはり本因坊に準じてなのだろうかと思っていた。確かに家は扶持をいただいてはいるが、芸技をご公儀から認められてのこと、武士ではない。いまは若党としての髷ではあるが、やがて兄弟子のように総髪となり、それからとなると鉄次郎は人前に出る自信がない。
武家は役職の多くが世襲で、嫡子にその役目が任されることが通例となっている。なので家を継ぐのは長男、御旗本も同様に一子が継ぎ、次男からは部屋住み、家が裕福ならばともかく、養子となったり、別のことで身を立てねばならなかった。しかし囲碁も将棋も五段格ともされれば指南役として大家に抱えられるには十分だ、そもそも出自はもとより、病に倒れる前には彼も養子先とて決まっていたのだ。
「病が癒えて、安井家門下なのに仏門に…」
「鉄次郎」
聞き咎めた兄弟子は険しい面相だ、それを笑って制し、道征は言った。
「よい。仏門に帰依したのは現世（うつしよ）の身で生き返ったのも神仏のご縁だろうと信じたからだ。それに、まだ生に続きがあるのなら、己のやりたいことをやって死のうと思うてな」

寒燈に飛車追う

一

ぱちん、と駒が盤上に音を立てて置かれる。それを見た途端、周りがどよめいた。反対に平吉はむう、と小さく唸り考え込んでしまう。

ここは湯屋の二階。男湯だけから上がれる座敷で、銭を払えば茶と菓子が食べられ、同じく銭湯で時間を潰しに来た仲間と将棋を指したり、碁を打ったり、ただ下らぬ話を延々としてだらっとしている事もできる場所だ。隅には月極めで幾らか払っておけば専用で使える脱衣棚が設けられている。自分だけで使えるから、板の間稼ぎに出会う心配も無い、と言うわけだ。

銭湯によっては、この二階座敷から女湯が覗けるところもあると言うが、ここはそんな設備も無いので、客層が落ち着いている。平吉もそこが気に入って、長屋からは多少遠いが気が向けば通っていた。

だが、この湯に来るのは、覗き窓が無いだけではない。平吉がここを気に入っているのには、理由がもう一つあった。それが今指している将棋の相手だ。

五十路を半ば越えた平吉よりはさらに上だろう。もうかなりいい歳をした爺様だ。長年熱い江戸の湯に入り続けて脂気の抜けたしわくちゃ肌で、商家とも違う丁寧な口調と相まって、人のいい爺様然に見せていた。だが、その皺に埋もれた目が、時々鋭くぎらりと光るときがあって、それなりに色々あった人生を生きてきたことを思わせた。

そんな爺様とこの二階座敷で将棋を指すようになってもう随分と経つ。互いに待ち合わせているわけではない。ふらりと来て湯に入り、二階を覗いて、相手がいれば駒を指す手つきをする。乗って来れば将棋盤をはさんで一局指す。それだけだ。だが、その時間が髄分といい息抜きになるのだ。

実力は六四で向こうの方が上手いから、悔しいが負けが多い。相手に言わせれば平吉のはまだ『下手の横好き』の内だそうだ。だが、それでも何局かの間にまぐれで一回や二回は勝つことがある。だから止められない。

今日はたまたま急ぎの探索もないので、これ幸いと昼から銭湯に来た。果たして相手もいて、そしていつものように盤を挟んで対峙している、と言うわけだ。

どうだ？　と目で尋ねてくる相手に、ムム、ともう一つ唸る。

「オヤジさんよ、また悪くしたなァ。コイツァ詰みだヨ」

何手先を読んだのか知らないが、同じく二階座敷で平吉たちの対局を見物していた若い男が諦めろ、と言う。囲碁にしろ将棋にしろ、娯楽として庶民にまで広まっていたこの頃では、見物しているのもいい暇つぶしになる。

だが、皆がそれぞれに口を出してくるものだから、収拾がつかなくなるのが問題だ。

「いやいや。まだ詰んじゃァいねェヨ」

「そうだそうだ。まだ手が尽きたわけじゃねェ。ソレ、そこに

合馬を指しなっし」
「なに言ってやがる、素人め。定跡ならとっくに負けにしてらァナ」
　こういう具合だ。職人然とした男と、若い内に隠居して以来、長年趣味に生きていると言った感じの男が互いに譲らない。
「そうよ、そこが判らねェから、お前ェたちァいつまで経っても勝てねェのヨ」
「不洒落たことを言うじゃねぇか。見ねェ、そこの飛車が遊んでいらァ。ソラ、飛車のまんまで攻める手ァこの前の会で、段持ちを破ったじゃァねぇか」
「それそこだ。飛車角ばかりが駒じゃァねぇのス。同じことで横歩、底歩だと一つ手ばかりに頼っていると、指し手が読まれやすくなる。それが判らねぇ内はヘボ将棋のままサ」
　流石にヘボだと馬鹿にされて腹を立てたか、職人風の男のがつっかかる。
「誰がヘボだと？　大人しく聞いていりゃァ、べんべんと。口が多いなァ手が少ねェからだろう」
「手なぞいくらでも出来るもの。定跡だけが妙手とは大きな勘違いかな」
　なにを。なんだと。わいのわいのと周りがやかましくなる。
「コレサ、静かになさいな。いくらなんでもマァ、こんな近くでああでもねェ、こうでもねェとやかましくしちゃァ、長考の邪魔にもなりましょう」
　対戦相手の爺様が人のいい笑みを浮かべながら、今にもつかみ合いの喧嘩になりそうだった見物人たちを窘める。
「こりゃどうも」
「ナニ、たかが素人将棋に喧嘩も興ざめでございますでナ」
　平吉の礼を受けてにっこりと笑う爺様の優し気な顔に、まま
よ、と打った一手は凡手、いや悪手だったか。ソレ好機とばかりに追い詰められた。受けて立つも反撃の隙すら見つからないままに攻め立てられてその局はひどい負けになった。当然見物人たちも落胆の声を上げた。
「オイラの方が、まだ上手いよ」
　手習いから帰ってきた子供だろうか。少年がちょっと生意気な口を聞く。
「太吉！」
　そこへ怒り心頭と言った風情の女の声が二階座敷に響いた。
「おっかぁ……」
　平吉よりも上手いと言った少年が、マズいところを見つかったと言う顔をした。見れば二階座敷への階段から女の顔が覗いている。年の頃は三十路手前か。眉を落とし、鉄漿をつけて丸髷に結った、典型的な長屋のかみさんの体だが、少し下がった目尻になんとも言えない色気のある年増だった。二階座敷中が少年とその母を見ていた。
「おっ母ぁ、じゃァねェよ。お前いつまでこんな所にいるつもりだェ？　お父っさまがお店（たな）に行かれると、お前をまだかまだかとお待ちだよ！　とっとと帰りやれ」
　母の言葉に少年は不満そうな顔を浮かべた。
「今に帰らァな」
「今に帰らァじゃねェヨ、今すぐにお帰りな、見たくもねェ！

＊お願いとおことわり＊

本PDFは試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本PDFの内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本PDFを有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr